

リ・モンスター
Re:Monster
金斬兇狐 Kanokire Yūkyō
6

スベ星

超強力な魔術を
駆使する魔導鬼・
亜種。



ブラ里

血と剣を支配する
ブラディロード
血剣鬼・亜種。



カナ美

アボ朗と共に生まれ育った
仲間にして正妻。
現在の種族は吸血貴族・
亜種。



ミノ吉

ミノタウロス
牛頭鬼・新種となったアボ朗の親友。
超重量級の身体と武具により、
圧倒的な実力を誇る。



セイ治

守りと癒しに優れた
セイントロード
聖光鬼・亜種。



アボ朗

ゴブリンに転生した主人公。
【吸喰能力】によって、
喰えば喰うほど強くなる。
現在は使徒鬼・絶滅種に
【存在進化】している。



イロ腐

あらゆるものを
腐らせる鬼腐人・
亜種。



クギ芽

全てを見通す目
を持つ九祇眼鬼・
亜種。



アス江

地と雷を操る巨体の
アースロード
地雷鬼・亜種。
ミノ吉の恋人でもある。



Main Characters
主な登場人物

目次

本編
7

番外編
仙光の舞踏界
247

本編

《二百二十六日目》

《シュテルンベルト王国》の王都にある、総合商会《戦に備えよ》本店。この店長の女武者は、俺、アポ朗がいなくても大丈夫な程に上手く切り盛りしてくれている。

王都の浮浪児を集めた年少実験部隊《ソルチュード》など、手足となる労働力もある。仮に彼女達では対処できない予想外の何かがあっても、支給品のイヤーカフスに仕込んだ俺の分体を介して、遠くから指示を出す事が可能だ。

よって、俺が王都に留まり続ける必要性はあまり無い。遅かれ早かれ、今後の活動の場は徐々に王国から外に移していくつもりである。

理由は幾つかあるが、最も大きなものは、王国内に存在する【神代ダンジョン】のランクは【亜神】級止まりで、その数も少ない事だ。

今後は戦力強化の為、俺単鬼ではなくカナ美ちゃんをはじめとする【八陣ノ鬼将】の八鬼と共に

【神代ダンジョン】を攻略しに行こうと思っている。もちろん【亜神】級でも楽しめる事は楽しめるだろうが、すぐに攻略を終えてしまえそう。より上位の【神】級や、世界に五つしかない【大神】級に挑むなら、どうしても王国外に出る必要があった。

まず潜るのは、【亜神】級の次の難易度である【神】級にしようと思っている。

【亜神】級すら未体験の他の皆がいきなり【神】級に挑戦するのは早い気もするが、既に俺が【神】級に挑み、しかも攻略した事を知った皆は、是非【神】級にと意気込んでいる。俺個人としても挑戦したいとは思っていたし、まず挑戦してみて、どうにもならなかったら、さっさと別の迷宮に潜り直せばいいだけの話だ。

【神】級でも浅い階層は【亜神】級の中層から深層と同じ程度の難易度らしいので、最後まで攻略しないならさほど難しくはないはずだ。

どこのダンジョンに潜るかはまだ検討中なのだが、今のところ最も有力な候補を挙げるとすれば、《アタラクシア魔帝国》の【フレムス炎竜山】になるだろう。

【フレムス炎竜山】は、魔帝国と犬猿の仲である《ルーメン聖王国》との間に存在する。このダンジョンがあるせいで大規模な戦争になり難く、小規模な争いや諜報戦が続いている訳だが、そこら辺の事情は一先ず置いて。

これまでのダンジョンのように地下へ地下へと潜っていく地下階層型と異なり、ここは今まで一

度も俺が挑戦した事のない、自然包囲型に分類される。

このタイプを簡単に説明するなら、【境界圏】^{ボータフレイス}と呼ばれる特殊で広大な領域内の全てがダンジョン化している場所、である。

大渓谷やら大森林やら色々な種類があるのだが、今回の【フレムス炎竜山】はそれらの中で高難度に分類される火山系だ。

ダンジョンボスが巢を構える螺旋状^{らせん}の火山を中心に、有害な火山ガスが噴出しているエリアや、溶岩の川が無数に流れるエリア、過酷な環境に適応した植物型モンスターで森が形成されたエリアなどが存在する。

出没するダンジョンモンスターも炎熱系と岩土系がメインの難敵ばかりの上、土地の特性を用いた極悪な天然トラップが至る所に設置されていて、攻略者の行く手を阻む。

フィールドボス——地下階層型における階層ボスと同列の存在——を殺して中央の螺旋火山にまで到達し、高位の【知恵ある蛇／竜】であるダンジョンボスを討ち滅ぼして完全攻略した者は、長い歴史を遡^{さかのぼ}ってみても存在しない。つまり、未攻略ダンジョンだ。

魔帝国と聖王国の双方に接しているという立地から、他の【神】級自然包囲型と比べれば挑戦者はかなり多い。

過去には、聖王国とその同盟国所属の【英勇】^{えいゆう}六名が手を組み、更に多数の仲間を率いて挑んだ

事もあったという。

全員が最低でも【亜神】級の攻略経験を持ち、他の【神】級を攻略した者すらいた。個としても群れとしても圧倒的な力を見せる彼・彼女達が挑むならば、この攻略ももうすぐ終わるか、と思われた。

だが、そんな【英勇】達の全員が、ここで消息を絶っている。その仲間も含めて生きて帰った者は一人もおらず、どうなったかはハッキリしていない。

ただ、【英勇】達が挑戦している間は激しい戦闘音が山の麓^{ふもと}まで響き続け、空を舞う【知恵ある蛇／竜】の姿が目撃され、数日後に途絶えたという。恐らく、ダンジョンボスの元にまでは行けたが、そこで負けたのだろう。

【英勇】すら攻略できなかったのは、やはりダンジョンボスが“亜竜”^{ドラゴン}などではなく本物の“竜”^{ドラゴン}だという点が最たる原因だろう。

大空を自由に動き回れる自然包囲型のボスが【知恵ある蛇／竜】だった場合、竜種特有の高い知性と膨大な魔力で、ヒトの技を遥^{はる}かに凌駕^{りやうが}する高威力の魔法による空爆攻撃を繰り返してくる。難易度は、ある程度空間に制限のある地下階層型の比ではない。

巨大な身体や超硬の鱗など、ただでさえ攻略は困難を極めるというのに、対抗手段が限られる上空からの飽和攻撃を前にすれば、たとえ【英勇】達といえども苦戦は必至だ。

しかも【神】級とあっては、【英勇】はともかくその仲間達は抵抗する間もなく殺されたのではないだろうか。

成す術なく蹂躪されたであろう過去の【英勇】達を思い、黙祷を捧げる。

どんな味だったんだろう、という思いは俺の胸の奥深くに秘める事にして。

難易度に見合った貴重な鉱物資源や、ダンジョンモンスターから得られる希少なドロップアイテムは、今後の目玉商品になるだろう。ダンジョンボスまで行けないとしても、挑戦する価値は十分ある。

調べた限り、他の候補もそれぞれの良さはあるのだが、やはり【フレムス炎竜山】が総合的に頭一つ抜けている感じた。

どうせ行くなら、ここが最良だろう。

ただ、八鬼の内の二鬼——イロ腐ちゃんと、ドド芽ちゃん改めクギ芽ちゃん——が『ちよつと暑いのが無理かなー。でも暑い所で汗を流し合いながら戦う雄達の宴……いやでも……ジュルリ』『今の私では足手纏いになりそうで、ちよつと……』と消極的なので、彼女らをやる気にさせる必要がある。

やる気がないなら置いていけばいいと思うかもしれない。だが、八鬼揃う事で発揮される『陣形効果』とやらの力を実戦で確認するのも目的の一つなので、今回は何が何でも連れて行く。

命令で無理やりという手もあるが、しかし二人がやる気にならない理由も一応納得できる部分がある。

アンデッドであるイロ腐ちゃんは炎熱に弱いし、戦闘能力に大きな不安を持つクギ芽ちゃんが皆の力になれるかは、確かに心配である。それぞれの理由があるので、一応最初は穏便に説得してみるつもりだ。

ただし明日から。

今日一日は、最近恒例になってきているミノ吉くんの格闘戦をする事になっていたのだ。

周囲の被害が大きすぎるので得物は使わなかったが、俺から学んだ武術を駆使し、優れた身体能力を十全に扱えるようになってきたミノ吉くんは、確実に強くなっていた。

絶え間なく繰り出されるその拳は速く、骨が折れそうになるほど重く、的確に俺を破壊しようと急所を狙ってくる。

全ての攻撃を受け流しつつ、ミノ吉くんの体勢を崩すように力を加えていったが、崩れそうになっても身体能力によって強引に立て直してみせた。

以前のミノ吉くんなら、間違いない地面に倒れてしまっただろう。もうこの程度の攻撃は、ミノ吉くんには通じないらしい。

その急成長具合に頼もしさを感じ、俺は自然と笑いながら、以前よりも本気で殴り合った。

あまり手加減なくいい相手が身近にいるというのは、有難いものである。

《二百二十七日目》

午前訓練のついでにイロ腐ちゃんとクギ芽ちゃんがダンジョンに行きたくなるよう説得してみるのが、反応は芳しくない。

まあ、一回の説得でコロツと意見を変えるところは最初から思っていない。このまま説得は続けるとして、しかしそれは王国から出る目処がまだ立たないという事でもある。

だから、今のうちにやるべき事を済ませようと、昼から仕事に取りかかった。

やるべき仕事。それは、工事が完成した我が屋敷の一階で行うマッサージサービスの宣伝だ。

手っ取り早く済ませる為、想定している客層の中でも地位の高いお転婆姫を最初に招待した。

お転婆姫だけだと宣伝としてはまだ弱いので、他にも最大一〇名、加えて身の回りの世話をする

お抱えの侍女や執事を最大二名まで連れて来てもらう。誰を呼ぶかはお転婆姫に一任している。

これは選ぶのが面倒になったから丸投げしたのではなく、お転婆姫が派閥の者達とより深い関係を結ぶ切っ掛けとしてくれればいい、という善意だった。

その結果、招待客の中にはお転婆姫の母である、第一王妃が当然の如く加わっていた。

普段よりも少々気合が入ったその格好は、実年齢よりも遥かに若く見え、それでいて大人の色香

を纏っている。

そしてその隣にはちゃっかり、王国お抱えの勇者の一人である闘勇がいる。二人の背後に控える四人の侍女さん達も顔馴染みだ。

いやまあ、お転婆姫に任せたら、このメンバーは高確率で入っているだろうとは分かっていた。

第一王妃の趣味嗜好にもようやく慣れてきた——他人の趣味だから、諦めたとも言——ので、絶対に嫌だという訳ではないのだが。

招待客の送迎に手配した【骸骨蜘蛛】に乗り、第一王妃を伴ってお転婆姫が一番に到着した。その意味深な笑みを見る限り、恐らくこの招待と引き換えに、第一王妃から何かしらの利益を得たに違いない。傍らに控える少年騎士の苦笑からも、ほぼ間違いないだろう。

お転婆姫、最近はまだあまり本性を隠さなくなっている気がする。素材は良いのだから、どこか黒さが滲む笑顔より明るい笑顔の方が似合うだろうにと思いつつ、気を取り直して、岩盤浴やオイルマッサージなどを招待客に体験してもらった。

岩盤浴では、専用の衣服に着替えて、シートを敷いた岩盤の上に寝転んでもらう。

直に肌で触ると熱すぎるが、シートを挟めばやや暖かく感じる程度になる。三〇分も寝転んでいれば、遠赤外線によって身体内部から温まるのだ。

これまであまり体験した事がないであろうその感覚に、皆が気持ち良さそうにしていた。

終わった時には、昔からあった身体の不調が和らいだ、と満面の笑みで言ってくれた貴婦人もいた。ここでガツチリと心を掴み、是非とも常連客になつてもらいたいものだ。

水分補給用に、迷宮産の清水しみずに塩、果汁などを少量混ぜたモノを出してみたところ、かなり好評だった。今後はバリエーションを増やそうと思っている。

オイルマッサージの方は、色んな面倒事を避ける為、基本的に客と同性の団員が行った。

今回使用したオイルは、生まれ故郷の《クーデルン大森林》で集めた素材と、今はその拠点にいるドリアーヌさんの蜜を配合して作った、様々な効果が即座に現れるという優れモノだ。

オイルの効果だが、美肌効果や若返り効果などは言うに及ばず、最も大きな特徴は、身体について余分な脂あぶらが、オイルに秘められた魔法的な不可思議効果で効率よく燃焼されていく事にある。これは一度だけでも効果が実感できる上、同じような効能を持つ既存の魔法薬と違って副作用らしい副作用が存在しない。

まさにお手頃かつ気持ちのいい、安心安全な美容マッサージダイエットオイル。招待客にこの効果を説明すると、皆目の色を変えていたのが印象的だった。

それにしても、流石はドリアーヌさんだ。種族的に異性を鹵獲ろかくする能力に秀でているだけでなく、最近は更に美容方面の能力に特化してきている。

一度味わえば麻薬のようにリピーターを増やす彼女のオイル調合技能は、非常に有難い。今度上

等なお土産を持つていこうと思う。

そんな感じで全行程を終えた後、感想を聞いてみると、全体的にかなり満足してもらえたようだった。本格的に始まつたらまた来たいと全員が言い、その場で予約してくれた。この事業も幸先は良さそうだ。

今回の招待客は全員が常連になつてくれそうなので、大切にしたいものである。

お付きの侍女や執事達にも、少しだけだが体験してもらった。これで彼・彼女達からも噂が広がるだろう。貴族の使用人は平民よりも給料が良いので、日々の疲れを癒しに来るかもしれないな。

夕方頃には無事宣伝活動が終了し、招待客達は来た時と同じく、骸骨蜘蛛でそれぞれの屋敷へ帰っていく。

雪道でも問題無く進める骸骨蜘蛛は乗り心地がいい。貴族や豪商など上客の送迎には、王都中を走らせている辻馬車仕様を更に豪華に仕立てた特別品を使用するつもりだ。存分に活躍してくれる事を期待している。

こうして招待客を自宅に送り届けたのだが、しかし全員が帰った訳ではなかった。

お転婆姫と少年騎士、それに第一王妃と闇勇及び侍女四人の八人は屋敷に残り、我が家の晩飯にまでチャッカリ出席したのである。

最初はどうしたもんかと思ったが、ニコニコと幸せそうな笑みを浮かべながら料理に舌鼓したつづみを打つ

第一王妃と闘勇の姿を見ると、別にいいかという気になった。侍女さん達も色々と宣伝を手伝ってくれたしね。

料理を作った者としては、美味そうに食べられると帰れとは言い難い。

食事の後、第一王妃達は生まれたばかりの我が子オプシーをデレデレと緩みきった表情で眺め、プニプニとした頬を突き、肌に生まれつき埋め込まれている寶石に触れていた。

母親である赤髪シヨートは、そんな第一王妃と闘勇に通じるところでもあるのか、気がつくともマ友的な友好関係を築いていた。

俺とお転婆姫の関係を思えば今更かもしれないが、社会的立場が隔絶しているこの三人が出会い、談笑している光景は、見る者が見れば啞然とするのではないだろうか。下手すれば不敬罪で処刑されている様な事もやっていたりするし。

結局お転婆姫達が帰ったのは、夜遅くになってからだった。

それにしても、街灯に照らされた夜の王都を骸骨蜘蛛が疾走する様はどことなく、地獄の使者が獲物を求めて走り回っているようである。

《二百二十八日目》

【フレムス炎竜山】は、調べた中では最も手頃で、最も利益が出そうで、今いる場所から比較的

近い。それに周囲にはそれなりの規模の迷宮都市があるので、そこに魔帝国内の拠点を造っておけば、聖王国と何かあった時に都合が良い。

しかしいざ実行するととなると、幾つか問題があった。わりと簡単に解決するモノから、やや面倒なモノまでチラホラと。

そんな問題の中の一つ、足手纏いになって迷惑をかけそうだから行きたくない、というクギ芽ちゃんの悩みを解決する為、俺は動いた。

もはや穏便な説得では埒が明かない、と判断していた。

これは、説得するのが面倒になった訳ではない。そう、決してそうではない。ただ、時間を浪費するのはどうかと思ったので、実力行使に及んだだけである。

雪がゆっくりと降ってくる肌寒い早朝、俺とクギ芽ちゃんは屋敷にある訓練場の真ん中で対峙した。

クギ芽ちゃんは、自分の身体から生み出した生体武器の和傘と、黒銀と翡翠で出来た扇型マジックアイテム【夜風の太夫】を装備。

対する俺の武器は、二メートル程の長さに切った、ただの木の棒が二本。これのみである。

そしてどちらも、自前の生体防具——俺は上半身が裸になるので訓練用ポンチョも——を装着し

ている。

防具はともかく、武器の攻撃力だけで言えば、覆しようのない差が存在する。

正面からぶつかり合えば、木の棒は容易く折り碎かれるだろうし、攻撃するにしても負荷に耐え切れず自壊してしまうだろう。

このように、武器の質では圧倒的に優位なのだから多少の余裕を持てばいいものを——クギ芽ちゃんは、普段はほとんど閉じている九つの瞳を限界まで見開き、その全てに怯えを宿しながら、緊張した表情を浮かべている。

一方、俺はあくまでも自然体だ。

この程度のハンデなら別に問題無いからだ。無駄な力みなど一切無く、二本の棒を手首と指だけで自在に動かして威圧し、ジリジリとクギ芽ちゃんに近づいていく。

しかし、一步踏み出せばクギ芽ちゃんは二歩下がり、二歩踏み出せばクギ芽ちゃんは六歩下がる。距離は開くばかりで縮まらない。正確に俺の攻撃範囲を見極め、僅かに届かないギリギリの距離を保ち続ける立ち回りだった。

試しに攻撃動作をとってみると、クギ芽ちゃんはそれに即座に対応した。しかしそれが虚偽であると見抜いていたのだろう。最低限の対策をするだけで、隙を見せない。

次は虚偽ではなく実際に攻撃してみる。

木の棒で地面に転がる小石を弾き、真剣な表情を浮かべるクギ芽ちゃんの顔を狙ったが、一発目の陰に隠していた本命の石弾も正確に把握して回避した。

どうやら【九祇眼鬼・亜種】^{バリエーション}となつて向上した情報収集・処理能力を最大限に使って、俺の行動を先読みしているようだ。

俺が動く前から動き始めるので、特別な技法でクギ芽ちゃんの認識をずらさない限り、全てに先手を打たれて、思うように近づけない。俺も相手の行動を読む事はできるが、クギ芽ちゃんのそれは俺以上に早く、正確なようだ。

とはいえ、クギ芽ちゃんの戦闘能力自体はやはり低い。

【鬼】にしては身体性能が虚弱で、機動力も体力も戦闘センスもあるとは言い難い。

これではせっかくの先読み能力も、十全に発揮できない。
俺が少し本気を出すと、クギ芽ちゃんは身体の反応が間に合わず、木の棒によって胴体を強かに打たれた。

一応手加減していたものの、身体を貫く衝撃に肺の中の空気をガフ、と強制的に吐き出しながら、地面を勢いよく転がっていく。

やっと止まった頃には、クギ芽ちゃんは立ち上がる事すらできなくなっていた。痛みをこらえながら、胎児のように縮まって小刻みに震えている。

一撃でこうなってしまうとは。クギ芽ちゃんが迷宮に挑むのに及び腰だったのも納得だった。

クギ芽ちゃんには責任感の強い性分だけに、不安なのだ。他人の枷かせになる事が。

しかし俺に言わせれば、戦闘能力の低さなど大した問題ではない。

防御力に問題があるのなら、防具類をガチガチに固めた上で、俺達で守ってやればいい。一緒に行く事を承諾しているセイ治くんには仲間を守る能力もあるので、十分カバーできるだろう。

それに戦闘には直接関わらなくてもいい。クギ芽ちゃんは俺以上の精度で周囲の状況を感じできるのだから、敵やトラップを発見する生体レーダーとして非常に役に立つ。

クギ芽ちゃんが活躍する場合は戦闘ではないのだから、戦闘能力など数秒間単独で自衛出来る程度あれば十分だ。そしてその条件は十分クリアしている。足手纏いになるという不安など、一度挑戦してみれば消し飛ぶだろう。

しかしメンタル面の不安に結果が引きずられる事はありうるので、確かに改善する必要がある。なるべく穏便な説得で済ませたかったのだが、仕方ない。だから、今日一日でミツチリと訓練を行い、強引に自信と覚悟を持ってもらう事にしたのだった。

——大丈夫大丈夫、腕の一本や二本折れても即座に治せるし、内臓が破裂しても秘薬でどうにかなる。

——だから安心して訓練をしようじゃないか、不安が無くなるまでずっと、さ。

そう言うと、クギ芽ちゃんは絶望に染まった表情を浮かべたが、それは意識の外側に追いやった。

それから半日の間に、クギ芽ちゃんは数百回地面を転がる事となった。途中で粉砕骨折やら内臓破裂やらをしつつも、訓練は無事に終了。今は何をしても絶対に動けない状態になっているので、強制終了とも言えるが、それはさて置き。

全身に大小無数の損傷を負い、それらを高速治療されながら戦い続ける事を強制される経験を積んだクギ芽ちゃんに、もはや怖いものなど何もない。大抵の事にはもう動じないはずだ。

最初からやる気になっていれば、こんな事態にはならなかったのに——なんて感想は、俺の胸の中に留める事にした。

《二百二十九日目》

昨日の訓練の影響か、ゾンビのように生気を感じさせない有様ありさまのクギ芽ちゃんだったが、戦闘時の守備は素晴らしく改善された。

試しにミノ吉くんは戦斧で攻撃してもらったところ、それを完全に見切ったのだ。意地になったミノ吉くんが結構本気で攻撃を繰り返すも、攻撃の余波すら一度も当たらない。もちろん、ミノ吉くんが全能力を解放すればまた違う結果になるだろうが。

攻撃に関しては相変わらず駄目駄目だが、これだけ自衛できるならばダンジョンでも足手纏いにはならないはずだ。

どこか壊れた笑みを浮かべるクギ芽ちゃん本人に聞いてみると、既にダンジョンに行く気満々、すっかり心変わりしていて安心した。

それはまあ良いのだが、『だから二人だけの訓練は勘弁してつかーさい』と本気で懇願されてしまったのには納得がいかない。ミノ吉くん辺りなら、心底嬉しがるのだが。

まあ、それはいいとして。

クギ芽ちゃんの件は片付いたので、今日は次の問題解決に取り掛かる。イロ腐ちゃんに関してだ。イロ腐ちゃんに対しても、クギ芽ちゃんのケース同様穏便な説得はそうそうに諦め、実力行使となった。

早速、訓練所でイロ腐ちゃんと対峙した。

涎を垂らして欲望に染まるイロ腐ちゃんの表情は、明らかに尋常ではない。狂気を浮かべた双眸がジッと俺を見つめてくる。

それだけならまだいいが、発散する狂気は【腐食の神の加護】の力によって物理的な力でも宿したのか、周囲に降り積もっていた雪を得体の知れない紫色の何かに変換した。

そして右手に持つ紫色の短槍の尖端から腐ったどす黒い液体が滴り、地面の雪だったモノと混じ

り合って、黒紫色の気体を発生させる。

まるで毒ガスのようなその気体はまるで意思があるかの如く蠢き、イロ腐ちゃんの背後に書物と筆を持つ【腐神】の幻影を発生させた。

彼女がこうなったのは、勝負に勝てば俺ができる範囲で一つだけ願いを叶える、と言った事が原因だった。

ある意味では我侭なイロ腐ちゃん。のらりくらりと俺の説得を回避するイロ腐ちゃんにイラつき、手っ取り早くやる気にさせようと食いつきそうな餌をぶら下げてみたのだが。

正直軽率だった、と思っている。

この状態のイロ腐ちゃんは初めて見るのだが、かなりヤバそう。対峙するだけで身の危険すら感じる。

特に背後霊のような腐神の幻影が、ヤバい。

独自の意思でもあるのかワサワサと腕を動かし、幻影を構成している黒紫色の気体を周囲に散らしているのだが、気体に触れたモノは例外なく腐っていく。雪や地面ですら腐食し、生物が触れば生きたまま腐っていくのだ。

そんな特殊な能力を含めても、戦闘能力だけなら俺が勝るだろう。だが、精神的なモノで圧倒されている、と言えいいのか。



できれば戦いたくないと思ってしまいうし、勝った場合は何を願う気なのか、怖すぎて聞けそうにない。

結果として、俺は勝利を収めた。

だが辛勝だった。戦闘では圧倒していたが、あの強烈な執念には流石に気圧された。

両腕両足を押し折ったのに、身体を芋虫のように蠢かせて近づいてくる様にはある種の恐怖すら覚えた。

正確に顎を打ち抜いて脳を揺さぶったというのに、それでも動く事を止めない姿はまさにゾンビのようだった。

終わってみれば、俺は怪我の一つもしていないが、トラウマになりそうな程の心的衝撃を受けた一戦である。

今後二度と、イロ腐ちゃんと賭けはしないと心に誓った一日だった。

とまあ、過程に色々と思外の出来事はあったが、大きな問題だった二人の説得は無事終了した。残る細々とした問題をこれから解消し、今から数日後、俺達は王都を出発するだろう。さて、さっさと準備を進めようか。

《二百三十日目》

今日は朝から吹雪ふぶきいていた。

氷雪混じりで吹き付ける風は強く、積雪は俺が埋もれてしまう程の高さになっている。

上空が黒雲に覆われているので陽光は差し込まず、今日一日は晴れそうになかった。

天候がかなり荒れている為、外での訓練は止めておく。やろうと思えばできるだろうが、成長著しい《ソルチュード》達にも、たまには休息が必要だ。

なので今日は室内で簡単なトレーニングを終えた後、勉強させる事にした。

個人個人の考える力は大切だ。

知っている情報が多ければ多い程、いざという時の助けになるだろう。子供ながらの柔軟な思考で、俺では思いつかないような発想を提示してくれるかもしれない。

それに読み書き計算だけでなく、応急処置などの医療に関する知識は、戦いの場に身を置く俺達には絶対に必要だ。

教育らしい教育を受けていない《ソルチュード》達にとって、ここで吸収した知識は今後必ず役に立つだろう。

我が傭兵団《戦に備えよ》パラベラムで働いてもらう事には変わりないが、自分の才能を自覚する切っ掛け

になったり、やりたい仕事を見つける事に繋がったりするかもしれない。

それに何より、脳筋ばかりでは組織運営が面倒になっていく。

経理担当とか企画担当とか欲しいし、頭脳労働できる手駒が多い方が、俺の負担は軽くなるのだから。

勉強に励みつつ、合間合間で料理や裁縫などをする、かなりゆったりとした一日だった。

雪の日ぐらい子供達の勉強を見たり、遊んだりしながら過ごすのもイイもんだ。

《二百三十一日目》

今日は昨日から一変、快晴だ。

積もった雪だけが昨日の名残なごりで、降り注ぐ陽光が反射されて白銀の世界が街中に広がっている。

城下街の民家に備わった煙突からは白煙が立ち上り、通日もザワザワという人々の活気に満ちていた。

肌寒いが気持ちのいい早朝、外で訓練をしていると何かの羽音と笑い声が聞こえた。

音と気配がする方を見上げれば、身長一五センチくらいの「氷雪妖精」スノーフェアリー達が、氷で出来た翅はねで軽やかに舞っていた。

翅が動く度にキラキラと舞い散る氷の鱗粉りんぷんが陽光を反射し、虹色の輝きを放つ。

幻想的な光景で、思わず見^み蕩れてしまいそうになる。

スノーフェアリーは、王国ではこの季節にしか現れない、可^{かれん}憐さと凶悪さを併せ持つモンスターの一種である。

サイズさえ考慮しなければ魅力的なドレス姿の絶世の美女・美少女であるが、捕まえて観賞用に売り飛ばそうと手を出したなら、思わぬ反撃を受ける。

具体的に言えば、周囲の環境を最大限に活用する氷結能力によって全身を氷漬けにされるのだ。身体は小さくても、環境を味方にする能力に優れる為に戦闘能力はそこそこ高いようだ。

とはいえ手を出さなかったら何もしてこないの、出会った者も大抵は無視するか、空中で踊る姿を見て楽しむに留める。

さて俺の場合は、見ていると段々どんな味がするのか気になり始めた。とりあえず見える範囲にいた一〇匹を、指先から飛ばした糸で捕獲しようと試みる。

指先で糸を操って鳥かごを作ると、アツサリと一〇匹纏めて捕獲できた。だが拘束した糸は一瞬で凍らされ、氷の球体になったかと思った次の瞬間には砕かれた。

パラパラと欠片が落下し、積雪にボスツと埋もれる。

ふむ、どうやら思ったよりも氷結能力が強く、臂^{りょうよく}力も見えた目以上にあるようだ。

なんて考察していると、捕獲しようとした事に怒ったのだろう、一〇匹は柔和な笑顔を一変させ、

憤怒の表情で急降下してきた。

手には氷で造った刺突剣を握り、自分よりも大きな氷杭を無数に生成して背後に浮かべ、その尖端を俺に向ける。

殺意を漲^{みなぎ}らせる一〇匹が編隊飛行で迫るその様^{さま}は、群れで狩りをする狼型モンスター　ブラックウルフ^フを思い出させる見事なものだった。

感心しつつ、今度は重く強靱な黄金糸によって編んだ網を射出した。慌てて散開したスノーフェアリー達だが、逃^{のが}す訳もなく一網打尽にする。

スノーフェアリー達は黄金糸も凍らせようともがいていたが、今度は凍らせられても壊す事まではできない様子だ。

空中に出来た氷球が重力に引かれて落下してくるのをキャッチし、銀腕で氷を砕いて、中身を取り出す。

黄金糸で全身を拘束されたスノーフェアリーが甲高い声で喚^{わめ}くので、ポキリと首を折って殺した後、一匹をバクリとひと口で食べてみた。

人型だが肉質は虫に近い。どこことなく、大森林の芋虫^{ぼうちゅう}を彷彿させる。濃厚でクリーミーな味わいは独特の美味^{うまい}さがあり、季節限定のつまみとして、かなりいいかもしれない。善は急げと集められるだけ集めた。

屋にミノ吉くん達と酒を飲んだが、迷宮酒とスノーフェアリーの相性はかなり良かった。

スノーフェアリーの数が少なかったのが不満ではあるが、しかし昼間に飲む酒は最高なので問題無い。今日はいい一日だった。

それと、王都を発つのは二日後に決まった。

明日からマッサージと岩盤浴が開始されるので、それを見届けた後に出立するのである。

外に出て、今後どんな強敵と遭遇するのか、スノーフェアリーのようにまだ食べた事のない食材に出会えるのか――色々と期待に胸を膨らませつつ、時は過ぎていった。

《二百三十二日目》

またも晴天となった今日は、マッサージ事業が本格的に開始する記念すべき日だ。

以前から本店の店舗で宣伝していたし、実際にサービス内容を体験した先日の招待客からも話が広がっていたのだろう。開店してしばらくすると、送迎用骸骨蜘蛛や自前の馬車に乗って、貴婦人や令嬢達がやって来た。

その数は思っていたよりも多く、待ち時間がだいぶ長くなったりもした。

あまり長く待たせると不満が出てくるので、意識を逸らす為に「熊蜂」のハチミツや大森林産果実などで作った甘味を食べられるコーナーに誘導したところ、これが思いのほか好評だった。皆、

これまでに無いような甘味に舌鼓を打ち、知り合いと談笑して時間を潰していた。

全体的に満足してもらえたようで、一日の売り上げも想像を遥かに超えた。上々の滑り出しと言えよう。今後も継続できれば、かなりの儲けになるだろう。

やはり特製オイルの効果は絶大で、少なくない数の貴婦人や令嬢達が購入を希望した。だが販売するには生産量が足りないので丁重に断り、継続的に来てもらう事を勧めている。

正規品より効能の劣る量産品ならどうにかなるので、それを売り出す手もありか、と今後の事業展開の一つとして頭の隅に置いておく。

夜にはお転婆姫がお祝いに駆けつけて、また宴会となった。

大量に持ってきてくれた酒は、職人達が丹精込めて作った逸品で、銘柄によつて微妙に味が異なっている。一つ一つ樽から試飲していくのにはワクワクしたし、その中から一番好きにあう銘柄を選ぶというのも、ただ飲むのとはまた違った楽しみだった。

祝いの席で、職人達がプライドにかけて仕上げた酒を飲むとあつては、やはりより一層美味く感じる。

《二百三十三日目》

今日、俺達は王都を^た発つ。

今回の遠征メンバーは俺と【八陣ノ鬼将】の九鬼だけだ。

赤髪ショートも行ったそうだったが、最近ハイハイをするようになった娘オプシーの世話があるし、まだ身体が本調子ではないので寒い中を遠出させる訳にはいかない。

すっかり大きくなったオーロ、アルジェント、鬼若^{おわかし}は連れて行きたかったが、挑戦する場所が場所だ。俺達でさえ余裕があるか分からないので、確実に足手纏いになる三鬼を連れて行く事は難しい。

しかも、魔帝国にはまだ拠点が出来ていない。むしろこれから拠点を造りに行くと言っていい。それはつまり一定以上の安全が確保できていないという事で、未熟な三鬼を連れて行って何かあったら大変だ。どうにかなる程度のトラブルで済めばいいが、最悪の場合、人質に取られた挙句殺されてしまうなんて事も十分起こりうる。

だから今回は置いていく。それは他のメンバーに関しても同様だ。

イヤーカフスがあれば連絡はできるので、王都に俺がいなくてもどうにかなる。お転婆姫という協力者もいるので、あまり心配はしていない。

いよいよ出発という段になると、王都の門前には、見送りに来た居残り組に加え、お転婆姫や少年騎士、第一王妃や閼勇などの姿もあった。

悲しそうに手を振る者や、土産を頼んでくる者など、態度は様々だ。

そんな皆に見送られ、俺達は【骸骨百足^{がいこつむかで}】に乗って出発した。

そしてある程度進むと、周囲に誰もいない事を確認し、一旦骸骨百足から降りる。

今回はこれまでにない程の長旅になる。普通の馬車なら月単位での移動時間が必要になる距離なのだ。普通の骸骨百足でもそれなりの時間が必要だが、できるだけ時間はかけたくない。

という訳で、俺達は骸骨百足の中でも特別な個体に乗り換えたのだ。

それは最初に作った骸骨百足ののだが、時間をかけて魔改造していった結果、普通の骸骨百足の三倍近い大きさになっている。大型トラックより遥かに大きいくらいだ。普通のと区別する為、今後はこの改造機は【骸骨大百足^{おおむかで}】と呼ぶ。

骸骨大百足の内部には、快適な旅の為の様々な機能が備わっている。

人数分のベッドは勿論、調理台や冷蔵庫や洗濯機のみならず、トイレや風呂まで。ここで暮らせるどころか、一般的な民家などよりも遥かに上等なレベルの環境である。

つまり骸骨大百足は、巨大なキャンピングカーのような物、と考えてもらえばいい。もしくは変形し自走し自衛する、移動要塞といったところか。

俺達は今日一日、骸骨大百足に乗って移動し続けた。

骸骨大百足の上で調理も洗濯も排泄もできるので、これまでの旅のように定期的に止まる必要は全く無く、日中に勉強やら遊戯やらをして過ごす間、はたまた夜に寝ている間も進み続ける。

できるだけ目的地まで直線的に、障害を退けつつ踏破していく。

進行ルートにはモンスターが跋扈する森林や溪谷があり、もしかしたら道中で襲われるかもと心配していたが、そんな事は一度もなかった。

骸骨大百足の大きさと速度と見た目の異様さに圧倒されているのだろうし、車体を包み込む分体による【隠れ身】などの隠蔽工作も一役買っているのだろう。

ともあれ、これなら予想よりもずっと早く到着しそうである。

《二百三十四日目》

今日も一日走り続ける。

それはいい。

とてもいい事だ。

遠く離れた目的地まで一刻でも早く行きたいのなら、休みなく走り続けるというのは、いい事だ。ただ、俺達の出発してから一度も止まっていない。

それは日課である訓練がやり難い、という事で、つまりそのままでは身体が鈍ってしまう。

そこで、骸骨大百足の屋根の上には訓練専用スペースが作ってあった。団員同士での組手まではできないが、ある程度の筋トレはできる、そんなスペースだ。

実際にやってみると、そこそこ気持ち良かった。

長時間の筋トレで火照る身体も、吹き付ける寒風や雪によって丁度いい具合になる。

それに刻一刻と変わり続ける周囲の景色は、旅をしているのだという事を実感させてくれる。

筋トレ中に進んでいたのは、緩やかな高低差がある草原地帯で、骸骨大百足が前方の積雪を豪快にかき分ける様は圧巻だった。大量の雪が爆発染みた勢いで左右に吹き飛び、また跳ね上げられては後方に流れていく。舞い散る雪は、陽光を反射して煌めいた。

氷に覆われた湖の横を通った時は、湖の中心に青銀の衣を纏った美女を見かけた。あれは“ニンフ”とか、それ等の一種だろう。

チラッと見ただけだが、非常に絵になる美女だった。不用意に近づけば【魅了】され、最終的には干からびて死ぬ事になるに違いない。アチラもコチラに気づいたようだが、その時には既に遠く離れていた。

それから、雪で出来た“スノーゴーレム”に群がる“スノーマスター”の姿も見ることができた。スノーマスターは、青水晶のような身体を持つ五〇センチ程のミニズ型モンスターだ。雪ダルマにも似た姿のスノーゴーレムが蓄える魔力を主食としており、スノーゴーレム以外には襲いかから

ないのだが、食い終わると一定時間後に強力な氷結ガスを周囲に撒き散らす為、注意が必要だ。

撒き散らされる氷結ガスは液体窒素の如く、直接浴びるとただでは済まない。運悪く氷結ガスを浴びた犠牲者が生きたまま氷像になるケースもあるらしい。

まあ火があれば簡単に駆除できる程度のモンスターなので、気をつけてさえいれば問題は無い。この世界にはまだまだ面白い存在がいるのだと実感しつつ、俺達は進み続けた。

《二百三十五日目》

昼頃、俺達は魔帝国の中で最も【フレムス炎竜山】に近い街——迷宮都市《ラダ・ロ・ダラ》を見下ろす丘に到着した。

正直、自分でもドン引きする程の速さである。

山があるうが川があるうが国境があるうが、とにかく何だろうがほぼ無視して一直線に進んできたとはいえ、これは流石に速すぎる。疲れ知らずのアンデッドが本領を発揮するところまでになるのか、と自分の能力で生成したモノの成果に慄くばかりだ。

ともかく、俺達は【フレムス炎竜山】に挑戦する前の情報収集なども兼ねて、迷宮都市《ラダ・ロ・ダラ》で数日過ごす事にした。

まだ秘匿^{ひそく}しておきたい骸骨大百足は一旦【異空間収納能力^{アイテムボックス}】で収納し、普通の骸骨百足に乗り換

える。都市内に入るには手続きが必要らしく、門前に出来た長い行列の後ろに並ぶ。

ズラリと並んでいるのは、魔帝国の国民の大半を構成する亜人種が多く、人間が多い王国とはまた違った光景だった。

ここなら【鬼】である俺達も目立たない——なんて事は、なかった。

ミノ吉くんはデカくて派手な外見な上、常にキョロキョロと興味深そうに周囲を見ている。ただ見ているだけなのだが、彼に慣れていないと獲物を見繕^{みづろ}っている風に見えるだろう。

それに俺達が乗る骸骨百足は、奇妙な形状である事に加え、周囲の乗り物のように飼^{テイム}い慣^{イク}らされた獣型モンスターに牽引される訳でもなく自走している。

これだけでも目立つのだが、カナ美ちゃんやブラ里^{きり}さんなど、美女揃いだ。美しさの系統の違いはあれど、皆存在感があつて目を引く。

まあ、注目されるのは慣れたものだ。

降り注ぐ視線を無視し続け、自分達の番が来たら事前に入手しておいた魔帝国の通貨で入都料を払い、とうとう俺達は都市内部に足を踏み入れた。

そこに広がる街並みは、パッと見ただけでも王国との違いが目につく。

犬小屋のように小さな家屋がズラリと並んでいる一画があったり、巨鬼^{トロル}でも問題無く生活できそうな程の大きさを誇る家屋が並んだ一画があったりと、まず大きさからして統一感が全くない。

その建材も、木材や煉瓦に始まり、何かの生成物のような見た事のないモノまで多種多様だ。

いくつもある店に王国では見られなかった料理が並び、食欲をそそる匂いがアチラコチラから漂ってくる。

興味深いので色々で見学しつつ、高級宿を見つけてチェックイン。

多少王国とは様式が異なるが、泊まるのに問題は無く、手荷物を置いた後は早速自由行動にした。ミノ吉くんとアス江ちゃんは早速デートに行くのだろう、腕を組んで仲良く出て行った。どちらも健啖家だから、食事メインになると思われる。

ブラ里さんとスぺ星さんも二鬼で出て行った。ここできしか買えない名剣魔剣の類や珍しい魔術書を求めに行ったに違いない。

セイ治くん、クギ芽ちゃん、イロ腐ちゃんは三鬼で一緒に出かけた。

ぶらぶらと歩いて適当に見て回るそう。両手に花のセイ治くんには嫉妬に駆られた輩が手を出してきそうだが、まあ、イロ腐ちゃんがいるから大丈夫だろう。イロ腐ちゃん、あの不気味な覚醒状態になっていなくても戦闘能力は高い方だし。むしろ嫉妬に駆られた男衆が、イロ腐ちゃんの腐手に侵されないか心配なぐらいだ。

残るは俺とカナ美ちゃんだが、二人で酒場に行く予定である。

これは、情報収集の為だ。

ご当地の銘酒を求めて、という私欲の為ではない。そう、情報収集の為なのだ。

そこら辺は間違わないように。

そんな訳で七鬼を見送り、さて自分達も出発——といきたいが、まだやる事があった。

まず右手首を切り落とし、それを材料に数体の分体を作って窓から放り投げる。分体は形状を変化させると飛行し始め、それぞれの役割を果たす為に散っていく。

欠損した右手は、迷宮酒を飲んで【補液復元】の能力を使って再生、数度動かして調子を確認しておく。

特に問題は無く、俺とカナ美ちゃんは早速酒場に繰り出した。

そこそこの酒場に入ってメニューを見てみたところ、この酒は火酒が多いようだった。モノによつては火を近づけただけで激しく燃え上がるらしく、『火気厳禁』と壁に注意書きがされている。

注文できるモノは全て飲んでみたが、どれもこれも美味かった。

【フレムス炎竜山】では、今飲んだモノと同等かそれ以上の代物がドロップするようなので、自然と気合が入る。

晩飯は皆で集まって食べ、集めてきた情報を交換する。

初めて知る情報も多かった。明日はその情報をもとに、必要そうな道具を揃えるつもりだ。明日の予定を立てつつ、温かいベッドに寝転んだ。

「英勇詩篇『輝き導く戦勇の背』の《副要人物》である称号【妖炎の魔女】【慈悲の聖女】保因者が《詩篇覚醒者／主要人物》である復讐者（シグルド・エイス・スヴェン）と出会いました」

「夜天童子の【運命略奪】が発動しました」

「これにより、【妖炎の魔女】【慈悲の聖女】の運命は夜天童子の支配下に置かれます」

「現時点で【妖炎の魔女】が覚醒状態にある事が確認されました」

「現時点で【慈悲の聖女】が覚醒状態にある事が確認されました」

「両者の凍結された能力を解除する決定権は夜天童子に有ります。

今すぐ解除しますか？

《YES》《NO》

えー、と？

とりあえず、《NO》を選択して寝た。

《二百三十六日目》

朝起きてまず最初に、復讐者に連絡をとった。

これは勿論、昨夜脳内インフォメーションのあった「英勇詩篇『輝き導く戦勇の背』」について、何をどのようにしてどんな事があったのか、事情を聞く為だ。そうして聞いた話によると、こうである。

鈍鉄騎士やスカーフエイスといった複数の団員と共に、王国中を修行して回っている復讐者は、王国と《キーリカ帝国》の国境近くのとある村に立ち寄ったという。

この村名産の乳製品を求めて、わざわざ予定を変更したそうだ。商魂たくましい【行商人】達が帝国まで運んだそれを食べた事のある鈍鉄騎士が『近くまで来たしよオ、土産としちゃあ丁度いいんじゃないか。あれ、結構いけるぜ』と勧めたのが切っ掛けだったらしい。

買う物を買ったら、さっさと次の目的地に行くはずだった。

だが村に近づいた時、復讐者はその常人離れた視力で、不安や焦燥を浮かべる村人の表情、包帯を巻いた無数の怪我人、そして最近破壊された形跡がある家屋や村を囲う柵を見出した。

そんな様子が気になった復讐者は、とりあえずスカーフエイスなどひと目で人外だと分かるメンバーは置いて、驚かれにくいように少数の人間だけを引き連れて進んだ。

予想に反して村にはすんなり入れたそうだ。しかし事情を聞く為に近づこうとすると、村人は慌てて逃げてしまったらしい。

何がいけないのか、と復讐者達は互いの顔を見合わせて、そこで失敗に気がついた。

復讐者や鈍鉄騎士など、正式に国軍に所属していた者が我が《戦に備えよ》に寝返った際は、それぞれ戦死したように偽装させている。

だから生きているところを見られると色々と問題になるので、彼らは正体を隠す為、外に居る時は【怒鬼の仮面】を装備している。村に立ち寄った際も、当然そのままである。

そんな武装した仮面の一団がやって来れば、そりゃそんな反応にもなるだろう。

これを聞いた時は思わず『間抜けめ』と思ったが、まだ挽回できる凡ミスなので、この失敗を次に活かせばいい。

だから一先ず説教するのは置いといて。

自分達は慣れて意識すらなくなっていた仮面も、一般人が見れば驚く代物だ、という事に気がついても、既に後の祭り。距離をとられた後は、村人は物陰から視線を向けてくるだけで、誰も近寄ってこない。

そして、それだけならまだ良かった。

物陰から向けられる無数の視線に込められた感情は、恐怖や怒りが大半を占め、長年探していた

怨敵を見るようですらあったという。復讐者達の死角になる物陰では鉾や棍棒を装備し、殺気立つ男衆もいたらしい。

物理的に襲う気満々である。

これはいくらかは排他的なところのある田舎の村だとしても、流石に異常である。やはり何かあるのだろう、と復讐者達はここで確信を持った。

このままでは埒が明かないばかりか、襲撃されて面倒事が加速しそうだと思った復讐者達は、仮面以外の武装を全解除して、危害を加える気は無い事を周囲に伝えた。そして『村長から事情が聞きたい』と言って、どかりとその場に座った。

それから、眉間に皺を寄せながら恐る恐る近づいてきた村人と話をした後、村長の家に招待されて、何があったのか聞き出す事に成功したのだった。

盗賊団《火事場の暴熊》——それが村の悩みの種となっている集団の名称だった。

数日前、赤く発光する鬘と蹄を持つ「ルミネセンスホース」に跨り、両刃の巨大戦斧を振るう赤毛の「熊人」が頭領を務める《火事場の暴熊》は、村を襲撃した。

唐突の出来事で混乱はあったものの、そこそこ自衛力を持っていたこの村は、村人総出で抵抗し、十数名の盗賊を討ち取った。

これ自体は結構凄い事だが、残念ながら防衛の綻びから多少の侵入を許してしまい、その時に若い村娘が数名攫われた。

思っていた以上の損害を受けた盗賊団は、これ以上力押ししても割に合わない判断したのだろう。『村娘を返して欲しくば金を出せ、出せば無傷で返してやる、ただし援軍を呼べば安全は保証しない』と言いつ残して去っていったそう。

盗賊団が去った後、村人達はアンデッドを発生させない為に村人盗賊の区別なく死者の埋葬だけを終わると、壊された家屋の補修も後回しにして今後どうするかを話し合った。

この村ぐらいの規模なら、村人全員が家族のようなものだ。お互いを子供の頃から知っているし、協力して日常を過ごしている。

だから村としては、身代金を払えるものなら払い、村娘達を取り戻したい。

だが要求された額は、家屋の修繕などを考えると、簡単には払う事ができない。

非情かもしれないが、村娘数人の為に百数十名の村人の生活が困窮するのも、それはそれで困るのだ。

それでも何とかしようと、やれる事はやってみたらしいが、結局解決の目処が立たないまま、支払い期限がやって来た。それが復讐者達が村を訪れた日の夕刻であり、もう少しで約束の時間になるところだったという。

時が過ぎるにつれ、自然と村人達の精神状態も穏やかではなくなりつつあった。そんなタイミングだっただけに、復讐者達は盗賊団の一員だと思われた結果、様子見しつつ隙あらば襲いかからんという村人の反応に繋がったのだそう。

俺は俺で、仮面はそこまで大きな理由では無かったのか、と思いつつ話の続きを待つ。

それでまあ、色々あって生まれ故郷を壊滅させられ、この手の輩に強い嫌悪感を持っていた復讐者は、ほぼ無償に近い金額で盗賊団の討伐を請け負った。

ただし、この討伐には他の団員は参加しないという条件で。

これは今回の件はあくまでも復讐者が個人的に請け負う、という形を取る為だった。もし鈍鉄騎士達も参加するとなると、傭兵団たる我々としてはそんな報酬額ではとても釣り合わないの、仕方がないのである。

そうした事情など知る由もない村長と村人は、ただならぬ気配を帯びた復讐者を畏れつつ、深々と頭を下げたそう。

そんな訳で、夕刻。復讐者は討伐依頼の手始めとばかりに、村の入り口にノコノコと集金にやって来た十数名の下っ端盗賊を、逃げる間も与えずサクリと殺害。

人質達はその場に連れて来られていなかった為、数名は生きのまま捕らえ、《戦に備えよ》流の拷問で監禁されている場所など全てを吐かせた。

手際よく情報を収集した後はそいつ等も処分し、遺体の後始末は鈍鉄騎士達に任せると、復讐者は一人、村を出発した。

その時には既に太陽は沈み、星月も無数の雲に覆われていた。ランタンでも持てばどうとでもなるが、復讐者は奇襲する側である。存在を知られない為に、目立つ光源を持つ事はできない。

だが夜間訓練の成果として、優れた知覚能力を十二分に活用できるようになっていた復讐者は、暗闇の中でも動く事が可能だった。夜闇はむしろ、復讐者の姿を覆い隠し、拠点で宴会中だという盗賊団員達を暗殺する助けとなるのである。

隙をついて村娘の安全を確保し、盗賊団を皆殺しにして、依頼は完了となるはずだった。しかし、盗賊団の拠点があるはずの、森の中の開けた場所は、遠くからでも分かる程激しく燃えていた。

何事かと思った復讐者は可能な限り気配を消して急行したが、現場に到着した時には全てが終わっていた。

夜に赤く輝くその場所で、復讐者は見て、嗅いで、聞いた。

《火事場の暴熊》の拠点の中央で、松明めいて激しく燃え上がるルミネセンスホース数頭と苦悶の表情を浮かべた盗賊達の焼死体。その傍らに転がる、潰された蛙のような無数の撲殺体^{ぼくさうたい}。

直前まで宴会していた事が窺える、周囲に散った料理の数々。砕けた酒瓶から零れて地面に染み込むその中身。粉碎されたロングソードや大きく凹んだブレストプレートなど、破損した武器の数々。

周囲に充満する濃い血の匂い。バチバチと燃える木造の簡易テントから立ち昇る黒煙。撒き散らされた臓腑^{ぞうふ}と糞尿の悪臭。

まだ息はあっても動けないのか、生きたまま炎に焼かれていく盗賊の断末魔。

それは、どう見ても誰かが盗賊団を殲滅した後だと分かる有様だった。

何が起こったのか復讐者が調べた末、激しく燃え盛る一画からやや離れた場所に、乱暴されたのかボロボロになった服を着た村娘達と、明らかに高価な武具を纏った二人の麗人を発見した。状況的に、この二人の麗人が村娘達を助けた事は明白だった。

そうして事情を聞く為に声をかける寸前、復讐者は二人に襲われた。

それが、復讐者の《副要人物》たる【妖炎の魔女】と【慈悲の聖女】との出会いだったそうだ。初対面いきなり襲われるとは、なんともまたインパクトのある出会いである。

後になって聞いてみたところ、【妖炎の魔女】と【慈悲の聖女】は復讐者を、村へ集金しに向向いていた盗賊団の仲間だと勘違いしてしまったらしい。

一応襲いかかる前に村娘達に聞いたが、『あんな人は知らない』と言われたので、先手必勝とば

かりに行動に移ったそうだが

そんな勘違いから始まった戦闘だったわけだが、二人に襲いかかれた復讐者は、苦戦しつつも見事に勝利した。

以前の復讐者のままなら、高度な連携を自然に行う二人の前に敗れていた可能性もある。

しかし復讐者は、自力を上げる修業として、強力なマジックアイテムではなくありふれた量産武器のみを使用し、強力過ぎる加護能力及び「戦技」を封印して戦ってきた。自身の力に振り回される事もなく、存分に使いこなせるようになったその実力で、勝利を手に入れたのである。

手加減するだけの余裕すらあった復讐者は、気絶させた二人から装備を取り上げて頑丈な縄で捕縛した後、村娘達に事情を説明した。

救い主だった二人が負けた事でパニックになりかけていた村娘達を何とか落ち着かせると、血の池地獄もかくあらんというその場から、気絶した二人を担いで一旦離れるように指示。村娘達が指示に従っている間に、盗賊団の所有物からまだ使える物の回収を済ませ、まだ勢いよく燃えていた辺りを消火したそうだが。

やるべき事を終えた後は、気絶していた二人を強制的に起こし、村娘達の前で事情を説明。目覚めた瞬間の二人は、拘束されている事に気がつくと思わずに激しくもがいたらしいが、事情を理解するとようやく大人しくなったという。

そうして二人は自分達の勘違いを理解し、その償いとしてしばらくの間復讐者の為に働く、なんて言い出した――

聞いた話は、大体こんな感じである。

正直、激しくトントン拍子というか、都合がいいというか。

これが「詩篇」のもたらす運命なんだろうな、と思いつつ。

二人が復讐者の為に働く云々についてだが、復讐者の権限では勝手に承諾する事が出来なかったもので、保留となっているようだ。一連の説明の後、その判断が俺に委ねられた。

だが、コチラの被害といえればせいぜい復讐者が怪我をしたぐらい。それも大したモノではなかった上、錬金術師さん作の魔法薬で既に回復している。

つまり、彼女達から受けた被害らしい被害などはなかった訳だ。むしろ彼女達が倒した盗賊団から回収した品もあるので、少しばかり儲けさせてもらった、とも言える。

よって、仲間入りを強固に反対する理由はない。それに復讐者の《副要人物》なら、今後役立つ可能性は高いだろう、という思惑もある。

一方で、《副要人物》だから大丈夫だとは思いますが、人づてに教えられた情報だけでは信用も信頼もできるはずはなく、彼女達と実際に話してみない事にはなんとも……

という事で、通信機能付き名刺、ならぬ「名鉄」経由で二人を面接した結果、問題無さそうだったので仲間入りの許可を出した。

今後は臨時団員として、復讐者の下で働いてもらう。能力はありそうなので、ぜひ頑張ってもらいたいものだ。

……なんてやりとりがあった他は、ひたすら情報収集に勤しんだ一日だった。

ただ、迷宮都市《ラダ・ロ・ダラ》の酒は絶品すぎて、情報収集のついでについつい飲んでしまったが、これは仕方ないだろう。

うん、仕方ない。

仕方がないんだ。

《二百三十七日目》

迷宮都市《ラダ・ロ・ダラ》には、『屋台通り』と呼ばれる一画が存在する。

名前通りズラリと屋台が並んでいるその通りは、串焼きやら焼きそばやら、そんな感じの様々な屋台料理が楽しめる場所だ。材料には派生ダンジョンから持ち帰られたドロップアイテムがふんだんに使用されている為、非常に美味しいと評判である。

誰でも使用できる無料訓練所で軽い午前訓練をこなした俺とカナ美ちゃんは、そこに昼飯を喰いに行った。

鉄板に載せられた分厚い肉が高熱を宿す灼岩しゃがんによって焼かれ、食欲を掻き立てる匂いとジュージューという小気味よい音を発している。匂いと音の相乗効果で、自然と涎が溢れてくる。

そんな肉を包むのは、新鮮で瑞々みずみずしい野菜。野菜特有の甘さが、肉の旨みをより一層引き出す事に成功している。

濃厚な肉と新鮮な野菜、この組み合わせは最高だ。

そしてそれさえ凌ぐしののは、やはり酒だ。

喉が焼けてしまいそうな程アルコール度数の高いこちらの火酒は、一度飲めば病みつきになるほど美味しい。個人的には、なんとあのエルフ酒よりも上だ。

まあ、好みの差、程度の違いではあるが。

その他にも色々と料理を食べ歩いたのだが、結構楽しめた。

加えてこの屋台通りには、美味しい料理が楽しめる、という事の他にも利点が存在する。

というのも、こここの主な客層は、派生ダンジョンから帰還したか、あるいは今から潜ろうとする攻略者達である。

攻略者は職業柄、俺達が求めている迷宮の情報を多く持っている訳だが、酒が入るここでは饒舌になり易い。その上、血と汗を流して無事帰還を果たした気の緩みなどもあって、普段は漏らさないような情報がポロっと出てくる事もある。

【盗聴】を使えば、通りを埋め尽くす雑音の中からも話し声を拾う事ができるので、ここでの情報収集は効率が良いのだ。

普通なら聞けないそんな貴重な情報を集めつつ、屋台通りの料理を堪能し、色んな店を冷やかしながらゆっくりと宿に帰った。

夜にカナ美ちゃんと色々やった後、小腹が空いたので、残しておいた「グリーフ・カリユブデイス」と「アクリアム・ゴーレムボール」、そして「レッドアーム・ジェミニユヴィア」の死体を二人で食べた。

【能力名】アレリタイ【水災の大渦】のラーニング完了」

【能力名】ヒタン【悲嘆の叫涙】のラーニング完了」

【能力名】トボク【地形効果…水】のラーニング完了」

【能力名】サンキョウ【緊急離脱】のラーニング完了」

【能力名】ハイコンプレッショ【高圧縮】のラーニング完了」

【能力名】ハードスフィア【硬質球体】のラーニング完了」

【能力名】シヤクフツ【灼沸の赤腕】のラーニング完了」

【能力名】サイン【重複存在】のラーニング完了」

【能力名】リスボ【存在復元】のラーニング完了」

亜神級神代ダンジョン【清水の滝壺】の階層ボス達はどれも美味かったが、この中であえて一番を決めるなら、やはりレッドアーム・ジェミニユヴィアだ。

特に両腕の部分が最高だ。
口の中で溶けてしまう程柔らかい肉に、ちょっとピリツとした辛さが加わり、味が引き立っていた。

カナ美ちゃんもかなり気に入っていたので、また皆で獲りに行こうと約束した。

これで残るは「シャークヘッド・ボルトワイアーム」の内臓のみだが、これは後の楽しみとして、しばらくとっておく事にしよう。

《二百三十八日目》

迷宮都市《ラダ・ロ・ダラ》に拠点を造る事にした。